

ブラッセル日本人学校における教育環境改善と教育実践

前ブラッセル日本人学校 教諭

徳島県阿波市立八幡小学校 教諭 山田 庸介

キーワード：教育環境、ICT、教材化、教育実践

1. はじめに

ブラッセル日本人学校は、西ヨーロッパの中央に位置するベルギーの首都ブリュッセルにある日本人学校である。ベルギーは連邦制をとっており、ブリュッセル首都圏地域、フランデレン地域、ワロン地域の3つの地域と、フラマン語共同体、フランス語共同体、ドイツ語共同体の3つの言語共同体の2層、計6つの組織で構成されており、地域ごとに使われる公用語が異なる珍しい国である。また、首都ブリュッセルは欧州連合（EU）の主要機関の多くが置かれているため、“EUの首都”とも言われており、非常に国際色豊かな都市である。

縁あってブラッセル日本人学校で勤務する機会を頂いた。子どもたちのために、学校のために、自分にできることは何なのかを考え行動に移しながら3年間を過ごしてきた。その中でも、教育環境改善に向けた取り組みと現地素材を教材化し実践した教育実践について、その概略を紹介したい。

2. 教育環境改善～ ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）環境の改善～

(1) 赴任当初のICT環境について

ブラッセル日本人学校は在外教育施設ということもあり、日本に比べて十分にICT環境が整っているとは言い難い状況であった。職員室で事務を行うためのPCや、授業で使うためのコンピュータ室用のPCはあったものの、授業に活用できる情報機器が少なく、インターネット環境も、職員室とPC室のみの無線LAN（Wi-Fi）下にあるという状態であった。これは、日本のように国や都道府県・市町村からの十分な支援がなく、授業料や企業・日本人会からの援助をもとに、職員が自分たちの力で環境整備を行っていかねばならなかったためである。そこで、このような状況を改善するべく、限られた予算の中で、「導入コストが低く」「誰にでも活用しやすく」「持続的に活用できる」ICT環境を構築することを目指し、環境整備を行った。

(2) 校内のWi-Fi環境の整備

全ての教室でWi-Fi環境を整えるための工事を行うことは予算面で難しかったため、Wi-Fiレンジエクステンダーの導入と手作業によるLANケーブルの簡易工事を行った。Wi-Fiレンジエクステンダーを使い、既存のWi-Fiの中継地点をつくることで簡易的にWi-Fi環境を広げた。Wi-Fiが飛んでいない場所については、ルーターから長いLANケーブルを伸ばし、その先にルーターを置いて電波の中継地を構築することで、校内すべてがWi-Fi環境下となった。

(3) 大型テレビの導入

日本では国の整備により、電子黒板を導入している学校が多いが、電子黒板は非常に導入コストが高いため本校では導入は見送ることにした。代わりに、家庭向けに市販されている大型（55型）の液晶テレビを導入した。予算の都合上、導入できる台数には限りがあるため、IKEA製の棚にキャスターをつけたものをテレビ台にして、子どもの手でも容易に移動可能にした。これで、学年ごとにテレビを共有して授業や集会の場面で使用できるようになった。

(4) 教師用タブレットの導入

デジタル教科書は非常に便利な物であるが、学年別・教科別にそれを揃えようとするとなれば莫大な導入コストが必要となってしまう。デジタル教科書の代用品として今回、教師用タブレットとしてAndroidタブレットを導入した。AndroidタブレットはiPadよりも拡張性に優れ、比較的安価なためである。Webサイトの「NHK for school」には無償で授業に活用できる動画や画像などのコンテンツが豊富にある。また、タブレットのカメラ機能を使い、教科書や子どものノートや作品を写真に収めることで、それを画面に映し出すことができたり、写真にアンダーラインを引いたりすることも容易にできる。また、動画撮影機能を活用して、体育や音楽の中で子どもたちと動画をもとにふりかえりに活用することも可能である。カメラ画面を投影することで、実物投影機的な使い方もできる。さらに、アプリをインストールしていくことで、できることが増えていく。

(5) テレビとタブレット画面のミラーリング

タブレットと大型テレビを繋ぐ際に、有線だと繋げられる範囲が限られてしまう。無線でミラーリングできる手段として、インターネット経由で接続する「Chromecast」とインターネットを介さず、本体と直接、無線接続を行う「Miracast」の2つの方法を本校では活用している。NHK for schoolの動画やYouTube上にある動画などをテレビに映し出す方法としては「Chromecast」が適している。動画を直接ストリーミングするため、遅延も少ない。反面、インターネットに接続されたWi-Fiの電波強度に依存するというデメリットがある。タブレット上に保存した写真や動画、カメラで撮影している様子をミラーリングする方法としては、「Miracast」が適している。インターネットを介さないため、安定しているからである。しかしインターネット上の動画を映し出す際には経由する地点が増えるため、遅延やガクツキが生じてしまう。

(6) 教師向けのICT活用研修の開催

環境を整備した上で、先生方に授業で活用していただくために、授業の中でタブレットとテレビとを活用してできることについて紹介する研修を行った。これまで、授業中にICT機器をあまり使っていなかった先生方も興味をもっていただくことができ、結果として、ICT機器を活用して授業を行おうという雰囲気が生まれ、様々な授業の中で活用・実践していく先生方が増えた。

3. 教育実践～現地素材を教材化

ブラッセル日本人学校の教育課程も日本と同様に、基本的には学習指導要領に基づいて教育課程を編成している。そこで、柔軟に学習活動を構成することができる生活科や総合的な学習の時間、道徳の特性を生かし、ベルギーをもっと好きになる、理解が深まる学習活動を考え実践を行った。

(1) 2年生 生活科における実践

2年生の生活科では、身近な地域の学習として、ベルギーに伝わる昔話をベルギー人である外国語教師やベルギーに長く住む日本人に教えてもらい、その昔話を劇化するという単元「ベルギー大好き！」を新たに考えた。ベルギーに住んでいながら、ベルギーのことについて知る機会の少ない子どもたちにとって、昔話を集め、劇化するという学習は、ベルギーのことにさらに興味をもったり理解を深めたりして、ベルギーのことがもっと好きになるよいきっかけとなった。また、2年から3年で帰国してしまう子どもたちにとって、自分たちで作った劇をいろいろな人に見てもらった経験は、非常に思い出深いものとなったようだった。

(2) 4年生 総合的な学習の時間（マロニエタイム）における実践

4年生の総合的な学習（マロニエタイム）では、ブリュッセルに住んでいる経験を生かし、ブリュッセルのよさについて考え、それを紹介するために、子どもたちオリジナルのガイドブックづくりを行った。ガイドブック

を作るために必要なブリュッセルにあるおすすめの方法を知るために、市販のガイドブックやインターネットによる情報収集以外にも、両親や教師、現地の人にインタビューを行いながら情報を集めるという活動を行った。また、1日でブリュッセルを回れるテーマ別のモデルコースづくりをグループごとに行い、自分たちのアイデアを生かしたモデルコースが完成した。主体的・対話的に活動に取り組む姿が見られ、ブリュッセルに住んでいるから知っている知識や住んでいるからこそその体験をまとめることができ、ブリュッセルのことをさらに知ろうとすることへの意欲喚起に繋がった。

(3) 6年生 道徳における実践

日頃体験している文化や習慣の「ちがひ」を列挙し、「ちがひ」を「あってもよいちがひ」「あってはいけないちがひ」に分類し、分類された2つの「ちがひ」について考えることを通して、基本的人権や国際理解について学ぶ道徳学習を行った。学習の中では、アクティブラーニング的な学習活動としてワールドカフェを取り入れ、体験や経験に基づく気付きや考えを交流し合うことができ、知識のみにとどまらない深い学びに繋がった。ベルギーに住んでいるからこそ得られた学びであった。

4. おわりに

これからのグローバル化社会で生きる子どもたちにとって、ここベルギーで生活するという大変貴重な経験になることは間違いない。しかし、在外教育施設に通っているからといって国際社会で活躍できる力が勝手に身につくわけではない。在外教育施設の特徴を生かし、子どもに身につけさせたい力をしっかりと考えた教育活動を展開することが求められる。3年間にわたり、試行錯誤しながらも在外教育施設の特徴を生かした実践内容は、子どもたちにとって記憶に残るような学習活動だったといえる内容だと思う。また、自分自身にとっても現地素材の「教材化」の経験は、大きな学びに繋がった。

ブラッセル日本人学校は、比較的年齢の若い職員が多かったり、小中一貫校という特徴があったりしたため、日本ではなかなか経験できない校務分掌や、小学校担任を務めながら中学生への出授業などを経験することができた。その中で特に、ICT教育環境の改善や事務効率の改善に尽力することができた。日本でもこの経験を生かし、積極的に学校をよりよくするために尽力していきたいと思う。

今後も、ブラッセル日本人学校の特徴ある教育活動が益々発展し、長く継続されることを願っている。